



四万十町  
町内、ぶら〜り散策

# 志和 浦分 ①



**東** 又より志和峰を経て、海に向かつて坂を下る。志和は、太平洋に注ぐ志和川に沿って拓けた地区である。坂をほぼ下り切った辺りからの農村地帯が郷分。海沿いの集落が浦分である。浦分には現在84世帯、129人が暮らしている。

志和の地名の由来であるが、岩礁（海中の浅いところに隠れている岩）によってくだける波（磯波）からきているという説がある。二千年以上前の古代から人が住んでいたことが、この地の出土品からうかがえる。鎌倉時代末期にはすでに集落が成立していて、戦国時代に入る頃には、志和・志和峰・与津地・大鶴（小鶴・津・小鶴（弦）津・大矢井賀（加）・小矢井賀（加））「『矢井賀は現中土佐町』の『志和七カ村』」を形成していた。江戸期にはいって、志和は浦分と郷分とに支配がわかれ、それぞれに庄屋がおかれることとなる。

近代になるまでは、江戸や京都・大坂との行き来は、険しい四国山地を避け、主に海路を使っていたため、窪川をはじめとする四万十川流域の人々にとって、志和はたいへん重要な物流拠点であった。窪川（仁井田郷）一帯で穫れた米のうち年貢米を差し引いた余剰分が、この志和の港から大坂へ「出荷」された。荷を運ぶのは志和の人である。志和の人たちは運賃収入を元手に、大坂で昆布や衣類などさまざまな物資を仕入れて帰ってくる。それらを、窪川の市（現在の古市町）で売るのである。窪川地域の一大物流拠点で



薬師寺は志和氏の菩提寺でもあった

あった志和には、各種商店だけではなく、大きな倉庫や銀行まであり、大いににぎわっていた。

志和の人々が海運業を安定的におこなったのには理由がある。それは、高い操船技術と、優れた造船技術を身につけていたということである。

戦国期、長宗我部元親が行った調査によると、志和には「船頭一人、水主三人、番匠三人がいた」とある。船頭は船長、水主は航海技術を持った船員、番匠は船大工である。1592年、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄の役）では、志和城の城主以下、100名近くの家臣団が、志和の番匠たちが作った船に乗り、船頭と水主の操船によって出兵している。

幕末、海岸線の高台には、砲台が作られた。これは海上を通過する外国船の見張り台としての役割を果たした。外国船が発見されると、窪川の役人に知らせるための狼煙（のろし）が上がったという。

浦分の氏神様（産土神）は諏訪神社。また、志和には室町時代の初めの建武二年（建武の新政の頃）に建立されたとされる薬師寺がある。

| (2月28日) | 人口     | 前月比 | 出生       | 死亡 | 転入 | 転出 |
|---------|--------|-----|----------|----|----|----|
| 男       | 8,256  | -15 | 男 6      | 16 | 8  | 15 |
| 女       | 9,227  | -6  | 女 5      | 17 | 13 | 5  |
| 計       | 17,483 | -21 | 計 11     | 33 | 21 | 20 |
| 世帯数     | 8,556  | -6  | (2月中の届出) |    |    |    |

窪川地域 12,316人 大正地域 2,473人 十和地域 2,694人

四万十川の  
水質状況

|          | 適正值(mg/l) | 3月13日  |
|----------|-----------|--------|
| リン酸      | ≤ 1.0     | 測定範囲以下 |
| 硝酸       | ≤ 0.5     | 0.504  |
| アンモニウム   | ≤ 5.0     | 測定範囲以下 |
| アニオン活性剤  | ≤ 1.0     | 0.05   |
| 化学的酸素要求量 | ≤ 10.0    | 2.013  |

調査：大正（吾川）  
資料：四万十高校自然環境部

四万十町通信

2018.4月号

Vol.145 (毎月10日発行)

●発行／四万十町企画課

●印刷／窪川印刷

〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17

☎ (0880) 22-3124

FAX (0880) 22-3123

UD FONT  
by MORISAWA

本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくい  
ユニバーサルデザインフォントを採用しています。